

じゅしゅう

報恩講 内勤法要

ご案内の通り、本年の報恩講は寺族だけによる内勤めとなりました。四月十八日(土)の十四時と十九日(日)は十四時の計三座のおつとめをさせていただきますました。下の写真にもありますが、いつもはたくさんの方がお参りくださるのに、子供たちがポツンと座る椅子を見ると本当に寂しい法要となりました。



ご案内の通り、本年の報恩講は寺族だけによる内勤めとなりました。四月十八日(土)の十四時と十九日(日)は十四時の計三座のおつとめをさせていただきますました。下の写真にもありますが、いつもはたくさんの方がお参りくださるのに、子供たちがポツンと座る椅子を見ると本当に寂しい法要となりました。

と御俗姓の拝読。そして二日目の御満座には七条袈裟を着けて、正信念仏偈作法のおつとめでありました。そして、毎座おつとめの後には、子供たちに報恩講を勤める意味をお話しすることができました。

では、報恩講を勤めるとはどういうことでしょうか。まずは宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲ばせていただきます。聖人九十年のご生涯の中で、たくさんのご苦労があったことでしょうか、浄土真宗の教えをあきらかにされて、伝え残してくださったお陰により今、この私にお念仏が届いております。報恩講は親鸞さま有難うのおつと

めだったのです。そしてもう一つ大事なことは、このご法縁の内に私のご信心を確認させていただくことです。そのままのあなたをすくい取るの阿弥陀さまの仰せを聞き受けて、いのちの解決をさせていただきます。夜のお座で拝読した御俗姓にも、「念婦命の真実の信心を決定せざらんひとびとは、その所詮あるべからず。まことに「水入りて垢おちず」といへるたぐひなるべきか。」とありました。

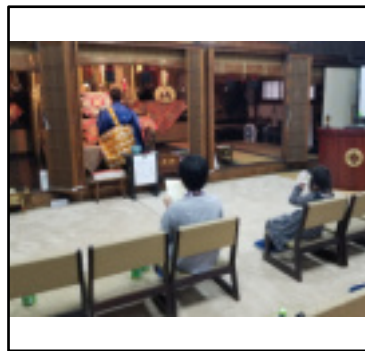
確かに今年の報恩講は寂しいご法要となりましたが、心と時間に余裕を持つことができましたので、自分の中でゆつくりと親鸞聖人と向き合うことができました。来年の報恩講はぜひお参りいただきたいと思えます。

第13号
(通算353号)

発行元
浄土真宗本願寺派
吉富山 浄覚寺
大阪市平野区
長吉長原3-1-10
06-6790-8350

今月のクイズ

- ・浄覚寺のご本堂、向かって右余間にお掛けしている方は「和国の教主」ともお呼びします。どなたをお掛けしているでしょうか?
- ・正解は次号にて。



お念仏というのは

つまり自分が

自分に対話する道

《真宗教団連合センターより》



御文章に聞く(第11回)

仏教語辞典



地獄に落ちて、耐えられない苦痛で苦しむように泣き叫ぶ様。阿鼻地獄と叫喚地獄から来ている。

阿鼻叫喚

『気になる仏教語辞典』
著・麻田弘潤 誠文堂新光社
仏教にまつわる用語をイラストとわかりやすい言葉で読み解かれています。ぜひお買い求めください。

狽すなごり章(一帖第三通)

まず、当流の安心のおもむきは、あながちにわがごころのわるきをも。また、妄念妄執のこころのおこるをも。とどめよというにもあらず、ただあきないをもし奉公をもせよ。狽すなごりをもせよ、

今回も御文章(蓮如上人からのお手紙)を味わっていきたいと思います。先月は「妄念妄執」についてお話ししました。妄念とは真理に背いた迷いの心、妄執とはその迷いからものごと執着することです。つまり、自分勝手な価値基準である我執という心が、複雑な問題や苦悩というものを生み出しているということでした。ところが蓮如上人は、「妄念妄執の

こころのおこるをも、とどめよということもあらず」と言われています。もちろん妄念妄執の心そのものを認められたわけではありません。自分自身を振り返ってみても、無自覚に自分中心の言動を行い、人を傷つけていることがあります。しかし、私の生き方、考え方が我執や妄念妄執という心から離れられないと気づかされたときには、それでいいのですと、私のことを認めてください。妄念妄執の心を起こしてはいけない、止めなくてはいけないということではなく、妄念妄執の心から離れることができないうことは、実は真実に出会っているということだとお伝えいただいております。

行事案内

先月にご案内しておりました、五月十日(日)久宝寺御坊顕証寺さまの住職継職法要、並びに、蓮如忌法要への参拝は、やはり新型コロナウイルスの影響で、一年延期されると連絡がありました。顕証寺新ご住職より、規模を縮小することになったも、何としてでも開催したい思いであつたが、せつかくするのであれば盛大に行いたいとの総代さま方の想いを聞き入れましたとのこと。来年には是非一緒に参拝させていただきますましよう。

(五月十日当日は行事が中止となりましたので、月忌参りにお伺い致します。)

編集後記

今月も「じゅごう」をお届け致します。皆さまいかがお過ごしでしょうか。世間では外出自粛の流れではありますが、いのちに日時を決めることはできませんので、先日お葬儀のご縁がありました。参拝の方も離れて座り、皆がマスクを着用しておつとめとなりました。悲しみを乗り越えていく方法として、こんな話を聞きました。①悲しみを肯定する。悲しむということは悪いことではない。②悲しみを表現する。泣きたいときには泣いたらいい。③儀式を行う。人生の節目を作ること、少しずつ悲しみが和らいでいくきっかけとなる。こんな時期ではありますが、葬儀の必要性を再確認することができました。(釋法道)